



年間第 26 主日 (ルカ 16:19-31)

あなたの暮らしは神の目に留まっていますか

先週 24 日 (火) の司祭団ソフトボール大会、五島チームが、決勝戦 3 対 10 の劣勢を最終回の驚異的な集中力でひっくり返し、11 対 10 で見事優勝しました。相手の長崎市内チームの張り切り神父さまは、相当悔しかったろうと思います。個人的には、連合チームに奉公に出されることもなく、7 打数 4 安打、1 ホームランでした。拍手 (の予定)。

優勝できた今年は 2 つの幸運が重なったと思います。1 つは、予選の相手が長崎市内チームでなかったことです。予選 1 試合、本戦 1 試合だけですから、予選で負けてしまえば決勝戦に回ることはできません。

もう 1 つは試合会場です。今年の長崎市松山ソフトボール場は、外野が金網のフェンスで囲まれています。他の試合会場はいつもホームランラインを引いて試合をしています。この違いが大きかったかもしれません。

どういうことかと言いますと、ホームランラインを引いた球場だと、ゴロでホームランラインを越えていった時は、自動的に 2 塁打になって 2 塁ストップです。ところが、フェンスが設置された今回の球場の場合、ボールが転がっている間は打者走者がフリーで進むことができます。実際、4 試合中 3 人がランニングホームランとなりました。ちなみにわたしは、歩いて帰ってくる文句なしのホームランでした。

さらに言うと、フェンスのある球場は大きな飛球が来た時にフェンスをかなり気にします。すると、フェンス直撃の打球はなかなか捕球できないわけです。ラインを引いているだけでしたら、ライン際でファインプレーの可能性があります。今回は金網のフェンスでしたので、それも難しい状況でした。

こうして、強打者のいるチームにかなり有利な展開になりました。しかしながら、わたしは今回の結果に浮かれることなく、48 歳になる来年も厳しいレギュラー争いに挑戦です。司祭が元気であることは、小教区、また教区も元気になる源だと思っています。

お許しを頂きたいことが 1 つあります。優勝を祝して、大分の日田温泉に明日から 1 泊したいのです。月曜日に行って、火曜日の昼のフェリーで帰りますので、火曜日と水曜日は夕方 5 時のミサでお願いします。

さて今週は、「金持ちとラザロ」のたとえです。貧しい人ラザロは死んでアブラハムのすぐそばに連れて行かれ、金持ちは死んで葬られ、陰府でさいなまれるわけですが、わたしは今回、どんな人が、最終的に父なる神の目に留まる人なのかということについて考えてみたいと思います。

まず、地上での金持ちと貧しい人ラザロの生活について考えてみましょう。金持ちは、「いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた」(16・19)とあります。彼は地上で、多くの人の目に留まり、多くの人の注目を浴びていたのでしょうか。一方のラザロ

は、誰の目にも留まらず、金持ちの門前にたたずんでさえも、だれからも見向きもされなかったのです。「犬もやって来ては、そのできものをなめた」(16・21)とあるのは、本当にだれも、ラザロに注意を払わなかったことが強調されているわけです。

この両者は、死後に境遇が逆転します。貧しい人ラザロは、天使たち、宴席の人たち、父アブラハム、ここには書かれていませんが当然父なる神に見守られています。これは神の国に住む者すべてに見守られているということです。

ところが金持ちは、死後はだれからも気に留めてもらえなくなりました。「炎の中でもだえ苦しんでいる」(16・24)と訴えているのに、父アブラハムにはその訴えが響かないのです。「指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください」(16・24)と哀願しますが、それすら断られます。いつもたくさんの人々にちやほやされ、取り囲まれていたのに、今はだれも気に留めてくれないのです。どんなに苦しんでいても、手を差し伸べてはもらえないのです。

アブラハムは言います。「子よ、思い出してみるがよい。お前は生きていた間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。」

(16・25) 貧しい人ラザロは生前だれからも気に留めてもらえなかったけれども、天の国の宴席にいる人々は皆、苦しんでいるラザロに注目していたのです。注目していたから、すぐに父アブラハムのもとに連れて行かれました。金持ちは、これほど天の国の宴席にいる人々が注目していたラザロに気付かなかったわけです。

なぜ気付かなかったのか。この問題はわたしたちにも深く関わってきます。旧約聖書の出エジプト記には、貧しい人に対する配慮を語った箇所があります。一般にユダヤ人は聖書を熱心に読んでいましたから、該当する箇所を十分承知していたはずですが、次のように書かれています。

「もし、隣人の上着を質にとる場合には、日没までに返さねばならない。なぜなら、それは彼の唯一の衣服、肌を覆う着物だからである。彼は何にくるまって寝ることができるだろうか。もし、彼がわたしに向かって叫ぶならば、わたしは聞く。わたしは憐れみ深いからである。」

(出 22・25-26)

金持ちがもし、自分がすでに何度も聞かされていた箇所を他人事と考えずに真剣に受け止めていたなら、父アブラハムはこの金持ちにも目を留めたことでしょう。金持ちが神の国の宴席にいる人々の目に留まり、将来招かれる可能性はいくらでもあったわけです。

わたしたちはどうでしょう。今の暮らしは、神の国の住人の目に留まる暮らしぶりでしょうか。地上で誰の目にも留まらない平凡な暮らしであっても、神の国のすべての人の関心の的になっている人も必ずいるはずですよ。

父なる神が目を留めてくださる生き方を目指しましょう。その姿が仮に誰の目に留まらなくても、神をよりどころとしている人を神は決して見落とすことはありません。今週のたとえば「誰の目に留まることを第一に考えて生きますか」とわたしたちに問いかけています。

年間第 27 主日 (ルカ 17:5-10)